Leaders TOPICS

ナラ枯れから樹木のリスクを考える

監事 自然環境部会 金丸勝彦

退職してから神奈川県立公園のパート管理員として働き始めてあっという間に 4 年半が経ってしまった。最初は長く勤められると思っていなかったが、自然に囲まれて適度に体を動かす心地よさに意外と長続きした。私の勤める津久井湖城山公園はエリア内に標高 375m の城山をかかえ県立公園としては最大面積となっている。樹木の種類も多彩であり神奈川の美しい広葉樹林 50 選にも選ばれるなど、四季折々に美しい変化を見せてくれている。

その一方で、自然環境の中で働くということはメリットばかりでは無い。この数年でも、大雨によるがけ崩れや強風による倒木、キアシドクガやマイマイガなどの大量発生、イノシシによる園路の掘り返しへの対応で右往左往することも多かった。そして、特に大きな影響が出ているのが一昨年あたりから急激に拡がったナラ類やカシ、シイ類の樹木が集団で枯死するナラ枯れである。

ナラ枯れは、カシナガ（カシノナガキクイムシ）という昆虫が、カビの一種である病原菌を媒介することによって起こる伝染病である。カシナガは木の幹に穴を開けてもぐり込み産卵するのだが、その際に持ち込む病原菌が内部で繁殖すると、水が吸い上げられなくなって急激に枯れてしまうのだ。全ての葉が一斉に変色し、夏だというのに赤く紅葉したような樹木に気づかれた方もいるかもしれない。

津久井湖城山公園でもナラ枯れの被害を免れることはできなかった。公園の担当者が園路および登山道の近くを 2020 年～2021 年にわたって調査したところ、500 本以上のコナラおよびアラカシ等にカシナガの孔道痕が発見されている。そして、完全に枯れてしまった木々は、最終的に枯れ枝の落下や倒木などのリスクを抱えることになる。安全最優先の方針により、予防策として薬剤注入、リスク回避策としての立入り禁止エリアの設定および危険木の伐木等により、幸いにもこれまで人的被害は出ていない。しかしながら、暫くは気の抜けない日々が続きそうだ。

江戸時代にもナラ枯れ発生の記録があったようだが、近年の急拡大については樹木の高齢化・大径化によりカシナガが繁殖しやすい森林環境になったことが要因のひとつと考えられている。里山で貴重な薪材として利用されていた頃のコナラなどは、20 年程度で伐採され萌芽更新によって再生をされていた。そのような状況下では、人間が無防備に大径木に接近する機会はそう多くはなかっただろう。緩衝地帯としての里山が失われたことで、居住地域でクマやイノシシによる被害が拡大しているというニュースが増えているが、何やら動物だけでなく植物でも同じような危険が増えてきているのかもしれない。

私は、リーダー会で自然環境部会に属しており、植物を題材にした環境教室に参加させていただいている。自然に恵まれた公園を利用して子どもたちに樹木の解説を行う機会も多いが、どうも人間にとってプラスの側面ばかり強調してきたような気がしている。CO_2 削減、生物多様性の保全などに森林の果たす役割が大きいことは間違い無いが、自然はいつもいつも優しい表情を見せてくれる訳では無いことを、強風で落下した枯れ枝でも見せながら次の機会に子どもたちに話してみようと考えている。

ナラ枯れで黄葉したように見えるコナラ

ナラ枯れ防止用の薬剤を注入する筆者